

人称的構造の素描

A Sketch of the Personal Structure

川津 茂生 KAWAZU, Shigeo

● 国際武道大学
International Budo University



先駆的二人称, スタンスとしての人称, 汝-汝関係, 間接的一人称

anticipatory second person, person as stance, you-you relationship, indirect first person

ABSTRACT

人間存在には人称的構造がある。人称的構造の理解は、スタンスとしての人称という考え方を取り入れることで深まる。はじめ、人間存在の表面は、一人称と二人称の混淆だ。しかし、向かい合う両者が、スタンスとしての人称として、先駆的二人称となれば、エゴイズムとしての「おもて」の一人称は消去され、純粋な愛となる。その際、直接的な一人称はなくなるが、相手の愛の恵みを受け止める「座」として、深いところに間接的一人称が生まれる。両者に新しい自我としての間接的一人称が生まれることにより、一人称-三人称関係の生成も促される。一個の人間存在は、その中に、一人称、二人称、三人称を同時に含む球面構造をなしている。愛に始まる人称的構造は、新たな苦悩も生むが、その苦悩はまた癒される。社会は癒しと苦悩の循環の繰り返しとして成立する。

The human being has a personal structure. The understanding of the personal structure gets deepened by adopting the conception of “person as stance.” Initially, the “face” of the human being contains the mixture of the first and the second persons. However, when the persons as stance of the two who are facing each other become the anticipatory second persons, the first persons of the “faces” as egoism are erased from them and they become pure love. Consequently, the immediate first persons vanish and notwithstanding the indirect first person comes to birth, in stead, in the depth as the “seat” for accepting the love of the facing other as “grace.” Through the birth of the indirect first persons as new egos, the generation of the first person – third person relationship is facilitated. A single human being has the sphere structure consisting of the first, second, and third persons at the same time. The personal structure starting with love produces new sufferings, though the sufferings get consoled in turn. The society is understood as the circular repetition of the sufferings and the consolations.

わたしは「先駆的二人称から見た存在」(川津, 2007)において、存在の見方には人称的構造があることを示唆した。その論考において、わたしは、存在には根源的に倫理的な分裂が在ることを、一人称と三人称の対立というかたちで捉えようとした。一人称がナイーヴに生きるとき、気づかぬうちに三人称の視点から見て自分勝手と映る行動をしてしまうのが、人間の常であり、そこにどうしても倫理的分裂と呼ぶべき、一人称(すなわち「私」)の見方と三人称(すなわち「私」を取り巻く社会)の見方の乖離が生じ、苦悩が生まれることを示唆した。

一人称と三人称の乖離ということは、哲学的に言えば、主観と客観の乖離であろうが、わたしは、この乖離を根本的に倫理的な問題と考えたから、この問題を知的に解決することは、正しい解決方法ではない、と判断した。もしこの問題を、たとえば、主客未分の純粹経験の立場から解決しようとするれば、そのような解決方法は、必然的に知的な問題としてのみ考えられることを拒み、人を宗教的経験の世界へと誘うであろう。

そのような意味で、西田哲学が、純粹経験の知的テーゼから、宗教的経験の深層へと向かったのは当然のことであった。そして、西田哲学は「絶対無」との出会いへと深化していく。絶対無が神なら、それは永遠の汝とも言える。しかし、もし宗教が、Buber (1979) がそう考えたように、「永遠の汝」との出会いにおいて、この問題を解決できる、と考えるなら、それは未だに問題の深みに出会っているとは言えない。なぜであろうか。「永遠の汝」との出会いにおいて、二人称は「向こう側」にいる。しかし、二人称とは、絶えず「向こう側」に定位されるべきものなのであろうか。永遠の二人称が「向こう側」にいることを確認することが、問題の最終的解決になると考えるなら、われわれは何か大きな見落としをすることになるのではないだろうか。

永遠の二人称はたしかに実在する。しかし、肝心なのは、そのようにして実在する二人称は、われわれにとって「恵み」なのだ、ということだ。そして、「恵み」には、与える側と受ける側がい

る。それなら、「恵み」は受けるだけでなく、また与えねばならない。もし二人称が「恵み」なら、二人称は受けるだけでなく、与えるものでもあるのである。

普通人称というものは、ある基準点を中心に考えられている。「こちら側」を基準点とし、そこに一人称を置いて、「向こう側」に、ある場合には二人称、別の場合には三人称を置くのである。

そのような捉え方からすれば、二人称は絶えず「向こう側」にしか現れない。

しかし、わたしが「先駆的二人称から見た存在」で明らかにしようとしたのは、二人称が「こちら側」にも定位できるということであり、また、そうしなくてはならない、ということであった。それは「恵み」という概念を用いて表現するなら、「恵み」としての二人称は、「こちら側」から贈与しなくてはならないということでもある。

しかし、「こちら側」が二人称になるということは、厳密にはどういうことなのか。それは、基準点を「こちら側」から「向こう側」へと移動したということに過ぎないのであろうか。もちろんそうではない。基準点を「向こう側」へ移動するなら、「向こう側」は最早「向こう側」ではなく、「こちら側」である。だから、「こちら側」が二人称になるということは、基準点が二人称になる、ということなのである。基準点が基準点に留まりながら、最早一人称ではなくなる、ということなのである。

わたしは基準点が先駆的に二人称のペルソナをつける、ということが愛であると、考えたのであった。そして、その愛が、一人称と三人称の対立から生じる苦悩を癒す、と考えたのであった。

しかし、ここにおいて大きな問題が発生する。わたしが考えた癒しの構造は、まず存在の一人称と三人称の分裂の苦悩を措定し、その存在の苦悩を外側から寄り添う別の二人称の存在が癒す、というものであった。すると、そこに二者の人間存在が想定されている。一者は苦悩し、他者は自ら苦悩しつつも、前者を癒す、という構造である。しかし、そこにおいてはまだ両者の人

称的構造が全体的に描写されていない。

二者あるいは多者の人称的構造はどのように素描されるべきであろうか。

さらにもう一つの問題は、わたしが考えたように、二人称が一人称と三人称の対立を癒す、とした場合、二人称が一人称と三人称の対立を癒すのではなく、それどころかむしろ、それを阻止してしまおうという、危険性はないのか、ということである。二人称が一人称と三人称の対立を阻止してしまうなら、それは倫理的問題からくる苦悩の癒しではなく、むしろ倫理的問題の発生の阻止であり、きわめて非倫理的な状況を生み出す。森有正は、日本社会における「汝-汝関係」ということで、そのような危険性を指摘したのではないだろうか。それは、二人称が一人称と三人称の対立の析出を阻止してしまう危険性であり、三人称がいて一人称がいるという社会倫理的関係の成長を阻む危険性である。それは、二人称は癒しなのか、それとも未熟なのか、という問題でもある。

未熟な社会では一人称と三人称の対立は析出しないであろう。その場合には、問題の出発点は一人称と三人称の対立とその苦悩ではなく、むしろそのような対立を成長させ、成熟させる要因を探ることになるだろう。そのような問題をも視野に入れて、以下の議論を進めたい。

まず、多者からなる人間関係の中の二者の関係を、一般的な二項関係と考えよう。ここで二項関係という表現は、森有正の表現を借りたのだが、森有正が二項関係ということばで、閉じた二人の関係を考えたのに対し、わたしは、特に閉じた二人の関係に限定せず、一般的に多者の中から二者を選んだ関係としての、二項関係というものを考えてみたい。そして、その二項を外側から観察するのではなく、一方に基準点を定め、内側から観察するのである。

そうすると、二項の一方が「こちら側」となり、他方が「向こう側」となる。その場合、通常「こちら側」が一人称となり、「向こう側」は二人称または三人称となる。Buberは「向こう側」が二人称となるか、三人称となるかで、「こちら側」

と「向こう側」の二項関係はまったく別のものになると考えたのであった。

しかし、そのような考え方は、はじめから、「こちら側」を一人称と規定し、「向こう側」を二人称または三人称と規定するという常識に支配されている。それに対して、森はまったく発想を逆転させ、「こちら側」が二人称となるような二項関係があることを示した。森によれば、日本人の人間関係は閉じた二項関係から成っている(森, 1976, 1977)。そこにおいては、たしかに「向こう側」は二人称であるが、「こちら側」は「向こう側」の二人称にとっての二人称なのである。ここでは両側が二人称になっている。そして、この閉じた「汝-汝関係」が閉鎖した人間関係を作り、そこにおいて一人称と三人称の対立の成立を阻害するのである。もし、一人称と三人称が対立しなければ、倫理的な社会というものが成立しなくなってしまう。私密的な世界と公共的な世界は、倫理的には区別されなくてはならないからである。

森の指摘する閉鎖した「汝-汝関係」に対して、わたしが主張する「先駆的二人称」とはどのように理解されるべきであろうか。わたしの主張する「先駆的二人称」も、やはり「こちら側」が二人称となるという意味で、森と同じように「こちら側」の人称理解を逆転させた。しかし、森とわたしが違うのは、わたしが一人称と三人称の対立をすでに倫理的に前提し、その対立の苦悩の癒しという意味で、「こちら側」が先駆的に二人称のペルソナをつける、という点である。森の二項関係は苦悩を癒すのではなく、むしろ回避している。

二人称が苦悩を癒すのか、むしろ回避するのか、という点を解明して行くためには、「こちら側」と「向こう側」の人称的構造をさらに詳しく検討しなくてはならない。

その際、わたしが提案したいのは、人称というものを人称を指示するために使用することに加えて、スタンスとしての人称という考え方を導入することである。

人称を人称を指示するためにのみ用いるとす

ると、指示の基点というものが必要となるから、「こちら側」と「向こう側」という区別はきわめて重要なものとなる。「こちら側」は指示の基点となるから、基点が基点を指示することになり、必然的に一人称となる。それに対して、「向こう側」は基点の向こう側だから、どうしても二人称か三人称になる。

このような人称の用法に対して、スタンスとしての人称というのは、「こちら側」であれ、「向こう側」であれ、「相手に対するスタンスとして自己がつけるペルソナの持つ人称」のことである。だから、「こちら側」はスタンスとしては、一人称でも二人称でも三人称でもありうる。「こちら側」は「向こう側」に対して、「私」でも「汝」でも「彼（彼女）」でも、あるいは「それ」でもありうる。もちろん、「向こう側」も同様に、スタンスとしては、「こちら側」に対して、一人称でも二人称でも三人称でもありうる。すなわち、スタンスとしての人称とは、人が相手を意識して、意図的に身につけるペルソナの人称である。

そのように考えると、スタンスとしての人称というのは、指示的人称と一致することも相違することもありうるわけである。そして、スタンスとしての人称を考えることにより、一般的な二項関係は、「こちら側」と「向こう側」を区別した上で、すべての人称の組み合わせが可能になる関係となる。「こちら側」と「向こう側」は「私-私」、「私-汝」、「私-彼（彼女、それ）」、「汝-私」、「汝-汝」、「汝-彼（彼女、それ）」、「彼（彼女、それ）-私」、「彼（彼女、それ）-汝」、「彼（彼女、それ）-彼（彼女、それ）」、のいずれの関係でもありうる。

スタンスとしての人称は形式的には、このようにすべての組み合わせが可能であるけれども、そのどれもが等しい可能性で実現するわけではない。スタンスとしての人称は、「こちら側」であれ、「向こう側」であれ、そのサイドの意志によって固定する。スタンスとしての人称は、意志の力で維持されるのである。スタンスとして「私」を意志すれば、「私」を貫き、「汝」を意志すれば「汝」を貫き、「彼（彼女、それ）」を意

志すれば「彼（彼女、それ）」を貫く。

ではもし、人が強い意志を持たなかったら、どうなるであろうか。強い意志を持たない場合、スタンスとしての人称は曖昧になるものと思われる。たとえば「こちら側」をとった場合、「こちら側」は「向こう側」に対して、「私」なのか、「汝」なのか、それとも「彼（彼女、それ）」なのか、曖昧になってしまうのである。スタンスとしての人称の不確定ないし融合である。指示的人称としては、「こちら側」は絶えず「私」だが、スタンスとしての人称としては、人称が不確定になってしまうのである。

ここで、「こちら側」が「向こう側」に対して、無関心であるものとしてみよう。そうすると、無関心であるということは、スタンスとしては三人称ということになる。「こちら側」は「向こう側」と関係を持つことを拒否しているからである。

しかし、その反対に、「こちら側」が「向こう側」に対して関心があるものと仮定してみよう。そうすると、「こちら側」は一人称ないしは二人称となる。「こちら側」は「向こう側」に対して、「私」として自己主張して関係を持つことも可能だし、「こちら側」は「汝」として、「向こう側」の「こちら側」に関わろうとする意向を受け止める態度を取ることもできる。

しかし、「こちら側」が「向こう側」に対して、関心を持ち、関わろうとする意向を持っているだけでは、「こちら側」のスタンスとしての人称は、一意的には決定されない。関わろうとする意向によって、三人称のスタンスを取る可能性はなくなるけれども、関わるには、スタンスとしての人称は、一人称でも、二人称でもよいのである。スタンスとしては、「私」として関わることも、「汝」として関わることもできる。

したがって、関わろうとする人称は、強い意志を持たない場合、「私」と「汝」の未分化な、一人称と二人称が不確定な人称となるのである。そのような曖昧な人称を、坂部（2007）にしたがって、「原人称」と呼ぶことにしよう。「原人称」においては「おのれ」や「てまえ」は一人称と二人称の融合した形で現れる。

さて、強い意志を持たない二人の人間が出会い、関わろうとした場合、「こちら側」も「向こう側」もともに「原人称」になってしまう。「こちら側」も「向こう側」もスタンスが曖昧なままに、「私」と「汝」のスタンスを無意識に交代させる。だから、弱い意志は、「向こう側」が少し強く要求してくれば、すぐに「向こう側」にとっての「汝」になってしまう。「向こう側」も「こちら側」が少し強く要求すれば、すぐに「こちら側」にとっての「汝」になってしまう。したがって、弱い意志のもとでは、スタンスとしての人称は、お互いに相手の意向を気遣い、簡単に、「汝」と「汝」の向かい合う関係になってしまうのである。そのような関係が、森の指摘する「汝-汝関係」ではないだろうか。そこに閉じた二項関係が出現するのである。

したがって、森のいう（閉じた）二項関係は、お互いにとって両者が完全に「汝」になっているのではない。お互いに少し「私」を出しながら、お互いにそれを気遣って、相手にとっての「汝」になるのである。だから、厳密に言えば、森の言う（閉じた）二項関係では、「汝」は純粋な「汝」ではなく、実際には「私」と「汝」の融合なのだ。それは、二人称-二人称関係というより、原人称-原人称関係である、という方が実体に近いのではないか。あるいは、原人称-原人称関係から、おのずと沸き上がってくる関係としての、二人称-二人称関係と言った方がよいかもしれない。

原人称的關係は、すぐれて「おもて」と「おもて」の関係といえる。「おもて」は「顔」である。おもてとしての顔が、融通無碍に「私」と「汝」を交代させる。そのような態度は、自然（じねん）な態度であろう。わたしたちは、無反省にナイーブに生きる時、人間関係の中で、「私」と「汝」を無反省に交代させるのである。

しかし、今、少し厳しくそのようなナイーブな生を分析してみれば、「私」とは極限ではエゴイズムであり、「汝」とは極限では愛なのであるから、ナイーブな生では、極端に言えば、あるいは本質を鋭く抉れば、エゴイズムと愛の融合

ということになってしまう。自然（じねん）な関係は、その関係を曖昧に捉えれば、和気あいあいとした、友好的な関係ともいえるが、本質を抉れば、エゴイズムと愛の混淆した、汚れた関係ともいえるのである。

このような人間関係が支配するとき、人間関係は積極的には、常にお互いの関わりを求めるあたたかい関係となるともいえるが、消極的には、エゴイズムと愛の未分化な未熟な関係の温存ともいえる。

そのような人間関係に対して、お互いの関わりを大切にしながら、愛をエゴイズムから明確に乖離させた人間関係はどのようにしたら成立すると考えたらよいのであろうか。

そのような課題を前にして、われわれは再び、スタンスとしての人称は、強い意志によって固定される、という事実に向けねばならない。

もし、自然（じねん）な関係が本来的には「私」と「汝」の融合であり、それは、本質を抉れば、エゴイズムと愛の混淆であるとすれば、われわれは意志の力によって、愛をエゴイズムから切り離さなくてはならない。それは、すなわち、スタンスとしての「汝」をスタンスとしての「私」から乖離させるということである。すなわち、作為によって、意志の力で、スタンスとしての人称を、純粋に二人称に固定するのである。それは「おもて」から、「顔」から、一人称を完全に消去し、それを純粋に二人称のみにするということである。直接相手に関わる「面」を、意志の力で二人称に固定するのである。そのことによって、「こちら側」は「向こう側」を無限に受け止める決意をするのである。それが愛である。

しかし、もし愛がスタンスとしての二人称からスタンスとしての一人称を乖離させることであるとするなら、乖離された一人称は消滅してしまうのであろうか。意志の力で一人称は消滅するであろうか。わたしたちは、もし、一人称を消滅させようとすれば、無限の努力をしなくてはならない。もし、自然（じねん）な一人称が死ねば、それで愛は完成し、人称的構造は安定するのであろうか。また、「おもて」から一人

称が死ぬなら、「こちら側」も「向こう側」も純粹に二人称になり、愛の関係には一人称も三人称も登場しなくなってしまうであろう。しかし、愛には一人称が三人称を愛するという関係もあるのではないのか、という疑問も生じうる。そう考えると、一人称や三人称が析出しない、二人称-二人称関係は本質的な愛の関係ではないのではないか、という疑問も出て来てしまう。

そのような疑問は、「私」を確立することが大事なのであり、確立した「私」が愛するのである、という考え方とも通底する。愛の前提条件は、一人称を消去することなのだろうか、それとも、一人称を確立することなのだろうか。

そのような疑問に対して、わたしは、愛の条件は一人称を消去することであり、一人称の確立の条件は愛である、と答えようと思う。愛の条件が一人称を消去することである、というのは、愛は「私」を捨てるものだからである。それでは、一人称の確立の条件は愛であるということであろうか。それは、「私」を捨てることが、「私」を確立する条件である、ということである。しかし、「私」を捨てれば、「私」はなくなるのではないか。それは矛盾ではないか。

「こちら側」が愛の意志によって「おもて」のスタンスとしての人称を二人称に固定し、一人称を捨てる時、確かに一人称は消滅する。それは、「向こう側」を無限に受け入れようとするスタンスである。しかし、そのようにして、「こちら側」から「向こう側」に対して、一人称の消去を示したとき、もし、「向こう側」も同じように「こちら側」に対して愛の意志によって、一人称を消去して、スタンスとしての二人称を示したら、どうなるであろうか。

そこに成立するのは、森有正の言うような、閉じた秘密の「汝-汝関係」ではない。そこに成立するのは、純粹な愛の二人称-二人称関係であり、「こちら側」はスタンスとしては二人称になりきっているが、そのことにより、「向こう側」の愛のスタンスとしての二人称から、驚くべきことに、「向こう側」の愛を受け止める「座」としての一人称を、すなわち「向こう側」の二人

称と対峙する応答「点」としての一人称を、「恵み」として、「こちら側」の奥深いところに生成させることが、「こちら側」に許されるのである。

そのことは、対称的に、「向こう側」にも当てはまる。両者は愛の故に、お互いに直接的な「おもて」はスタンスとしての二人称になりきっているが、両者とも相手の愛の故に、「おもて」の手前の奥深く、相手の愛の「恵み」を受ける「座」としての一人称が、「間接的一人称」として、生成してくる喜びを与えられるのである。逆にいえば、両者とも、愛の故に、相手に「恵み」として「間接的一人称」の生成の喜びを与えるとも言える。

この間接的一人称は、「おもて」の二人称と競合したり、融合したりする一人称ではない。「おもて」の二人称は直接的な剥き出しの二人称で、間接的一人称はそれと競合する場所に生成するのではない。間接的一人称はどこまでも控えめに、奥深いところに生成するのである。それを「自我」と呼ぶとすれば、自我は本来他者からの恵みなのである。

しかし、そのようにして、ひそやかに、恥ずかしげに、両者が相手の間接的一人称の、すなわち自我の、生成を促すとするなら、そのとき始めて、向かい合う直接的二人称の二つの表面の奥行きに、ひそやかな二つの間接的一人称が対峙し合い、「こちら側」のひそやかな一人称は「向こう側」のひそやかな一人称を、遥かに見つめ、それを「向こう側」の可能的三人称として、静かに眺めやる余裕を持つのである。

このようにして、「おもて」から直接的一人称を消去させることが、結果として、表面としての「おもて」ではなく、その奥の深いところに、間接的一人称を誕生させることになる。お互いに「おもて」から直接的一人称を消去させ、先駆的二人称となりきった「こちら側」と「向こう側」は、お互いにゆっくりと、恥ずかしげに、間接的一人称の生成を許し合う。それが存在の核としての自我であろう。

つまり、表面としての「おもて」の二人称と、その奥深くに核として生成する自我のトポロジカルに構造化した人称的構造が人間存在を形成

するわけである。

このことをもう少し分かりやすく言えば、はじめ向かい合う両者は、向かい合う二つの表面としての「おもて」でしかない。そのとき、表面は、直接的一人称と直接的二人称の未分化な状態である。それは直接的エゴイズムと直接的愛の混濁であるが、両者がお互いに適当に向かい合う「おもて」の呼応をリズムカルに維持している限り、その関係には特に問題は生じない。節度を保てば、そのような関係でも、うまく調和する。しかし、もし、そのような関係に混乱が生じたらどうであろうか。直接的一人称と直接的二人称のバランスが崩れ、向かい合う両者の「おもて」の一人称がお互いに衝突してしまったら、どうしたらよいのであろうか。そのような両者の戦いの状態を克服するためには、両者は愛にならねばならない。すなわち、「おもて」の一人称を捨て、完全な愛の二人称にならねばならない。しかし、わたしが言いたいのは、そのようにして、完全な愛の二人称になりきり、表面としての「おもて」から「私」を消去するとき、その愛の二人称が、お互いに「おもて」よりずっと深いところに、その愛を恵みとして受け止める「座」としての、深い「私」を間接的一人称として生成させることを許し合うというダイナミズムが愛の理論として可能ではないか、ということなのだ。

間接的一人称としての自我は、相手に許されて、恵みとして、恥ずかしげに、おもむろに芽生えるものなのである。

そのためには、向かい合う両者は愛になりきらなければならない。分かりやすくいえば、一度「私」を捨てきらなければ、恵みとしての「私」は決して生まれないのである。

しかし、それなら、一体誰が、そのような完全な「無私」を一度でも実現できるのであろうか。わたしは上に、強い意志を持てば、それが実現できるかのような書き方をしたが、しかし、それは厳密に言えば間違っている。だれも、意志の力だけでは完全な「無私」に、完全な愛に、完全な先駆的二人称になりきれないのである。それをどんなに強く望んでも、だれも人は、「おも

て」から一人称を消去しきれない。だが、この罪の身体からわれわれを救ってくれるのであろうか。

その答えをわたしはキリスト教信仰に求めよう。まず、すべての人に先んじて、先駆的二人称となったイエスが、われわれに「信仰」によって、「おもて」の「私」を十字架につけて消去することを可能にさせ、そのことを通して、われわれを愛の人となさしめるとともに、イエスの、またイエスの他の羊たちとの愛の関係に入ることを通して、われわれに、「新しい一人称」を間接的なものとして、生成させることを「恵み」として許し給うのである。

「おもて」の一人称を強く主張することが、自我の確立だと考えるのは、まったく間違っている。「おもて」の自然（じねん）な一人称は、激しい苦悩とともに、捨てるのである。それが必要であることを人が知るためには、現実の人間関係で、自然な調和というものは崩壊しているのだという、厳しい経験を経なければならない。おのずからなるもの（自然な関係）から、みずからなるもの（「私」）が、順当に生まれてくるなどと考えるのは、現実の破綻の意味を十分に認識していない甘い人間観察に基づく誤解に過ぎない¹。森有正がヨーロッパで経験した厳しさとは、そのような厳しい否定を媒介にした肯定であろう。

そこでもしここで、表面としての「おもて」と深い核としての間接的一人称が構造化されるとすれば、その深い核としての間接的一人称は視「点」として、「おもて」の裏面としての自己の身体を対象化して、三人称的なものとして見ることはないだろうか。そうすると表面としての「おもて」、深い核としての視「点」、視「点」から対象化して見られた裏面としての身体が構造化される。これをなるべく分かりやすい表象で表そうとすると、球面構造がよいものと思われる。球面の表面と裏面と裏面を対象化する視「点」としての球の中心である。この点についてはさらに検討する必要があるが、「向こう側」の「おもて」のさらに深いところに生成する、「向こう

側」の自我が、「向こう側」にとっては一人称でありながら、ある意味で、「こちら側」から見たとき、「向こう側」の存在の核として、三人称的なものとなり、その意味で、「こちら側」の深い自我は、「向こう側」から見れば三人称的なものとなり、ある種のよそよそしさをお互いに身につける。そのような深い自我は、ものを対象化して見る視「点」ともなる、と思えるのである。そのとき自己の身体は対象化された三人称的なものとなるであろう。

そうすると、向かい合う二人の人間は、向かい合う球面となり、それぞれの表面は二人称、裏面は三人称、球の中心には、間接的一人称、という構造になり、一人の人の球面構造の内部に三つの人称がそれぞれ構造的に配置される人称的構造があることになる。それをわたしは一個の人間のあるべき人称的構造と考えたい。一個の人間は同時に、二人称（捨て身の愛）、一人称（恵みの故に芽生える自我）、三人称（対象化された身体）なのである²。そして、その構造は他者との出会いの中で維持される。

この人称的構造は、愛の癒しの結果生じるものでありながら、実はその分裂した構造の故に結局は分裂の苦悩を呼び起こすことにもなる。さらに、向かい合う両者の関係は、両者の奥に間接的一人称が生成されることにより、一人称（「私」）と三人称（「社会」）の対立の発生の基盤ともなっていくのである。そこに新たな苦悩が生まれる。しかし、それは癒しに伴う苦悩であり、その苦悩は、再び先駆的二人称が癒すのである。その苦悩は、いわば、人間の倫理的生の条件であり、それを避けることは不可能である。だから、絶えず、繰り返す、癒しの業がなされなければならないのである。われわれは、癒しが苦悩を生み、苦悩は再び癒される、という限りない循環の中で、最終的な癒しを終末論的に待っているのである。そして、その希望が決して裏切られないということは、われわれが現実の社会の中で小さな癒しをたゆまず続けていくことによって始めて確認できることなのである。

参考文献

- Buber, Martin (1979). 我と汝・対話 岩波書店
川津茂生 (2007). 先駆的二人称から見た存在 教育研究 49号 21-29 国際基督教大学
木村敏 (1994). 心の病理を考える 岩波書店
木村敏 (2007). 分裂病と他者 筑摩書房
森有正 (1976). 遠ざかるノートルダム 筑摩書房
森有正 (1977). 経験と思想 岩波書店
坂部恵 (2007). 坂部恵集 3 共存・あわいのポエジー 岩波書店

注

- 1 木村 (1994) は、「おのずから」から「みずから」が析出してくると考えているが、わたしはそれは基本的に間違っていると思う。「おのずから」の破綻というか、徹底的否定が「おのずからならざる新生としてのみずから」の析出の条件なのである。もちろん、「おのずから」がうまく作動し、調和が維持されている間は、そこから派生する「みずから」は機能する。しかし、「おのずから」は破綻する。なぜなら「義人はいない。一人もいない」からである。坂部 (2007) は「キリスト教的なもの」と精神病理的なものとの親縁の事実」を指摘しているが、わたしはそれをわたしの視点から解釈できると考える。われわれはキリストとともに十字架に付くとき、「おもて」の直接的な一人称を消去させて愛になる。そして愛の共同体の中で、相手の愛を恵みとして受け止める間接的一人称を芽生えさせるのだが、その際、直接的一人称の消去から間接的一人称の発生までの間にはタイムラグがある。そのことのメタファーとして、キリストの十字架上で死と復活の間の三日間の時間の経過というものがあるのである。そのタイムラグの間、わたしの理論によれば、いかなる一人称も存在しない。もしそうだとすれば、それこそ木村 (2007) のいうような、自己の自己性が析出しない、病的な状態だということになる。間接的一人称の生成には、一人称がどこにもないという病的な苦しみを忍耐する時間の経過が必要なのである。その苦悩の忍耐を励まし、癒し、間接的一人称の発生を促すのが「先駆的二人称」としての向かい合う存在なのである。それはまた、「先駆的二人称」としてのキリストが人の心を癒すということの実態でもある。
- 2 そのような意味で、「こちら側」も「向こう側」も複数の人称を持つ球面的人称構造を持っていると言える。